

# David Glaettli

## ダヴィッド・グレットリ

1977年スイス生まれ。美術と日本語を学んだ後、ECALにてインダストリアルデザインを専攻。デザインインとインテリアコーディネートの実務を経験し、2008年来日。柳原照弘のデザインスタジオに参加。2013年独立し、現在Karimoku New Standardのクリエイティーブディレクションのほか、有田焼のブランド「2016/」のデザインマネジメントを行う。

<http://davidglaettli.jp/gdd/>

来日して10年、木製家具や磁器などのものづくりの現場とデザイナーの橋渡しをしながら、グローバルな市場への展開もサポートしているダヴィッド・グレットリさん。プロジェクトを重ねるなかで、日本のメーカーが抱える課題が見えてきたという。

「世界的に見て、日本企業の技術力とその経験値の高さは圧倒的なものがあります。ただ、足りないのは『何をしたら良いのか』という目的意識。特にOEMなどで下請けを長年続けてきた製造業者においては、明確な意志を持っていないんじゃないかなと感じるときさえあります。

売り上げの低迷から、何かしら新しい動きをしなければいけないという焦りを感じながらも、何から手をつけて良いのか、誰と手を組めば良いのか分からず、そのまま時間だけが無駄に過ぎ去ってしまうという話はたしかによく聞く。

「技術や製品が良いのに事が進まないのは、作り手と消費者のあいだに大きな隔たりが生まれ、自分がやっていることが最終的に誰のためのものづくりなのか分からなくなってしまっているからではないでしょうか。流通や仲介の業者の声を反映するだけでなく、たまには工場の外にでて、市場の動向や消費者の反応を自分の目で確かめてみると、新しい気づきが生まれるかもしれません」

現代の情報の流れはとてつもなく早く複雑だ。そのために、知る人ぞ知るという技に注目が集まる

可能性は低い。

「自ら手を上げて市場にアピールすることです。技術的な要素はもちろんのこと、歴史や伝統に培われた思想や態度、ものづくりに対する情熱と信念など、自身の持つポテンシャルを最大限に引き出す努力が必要でしょう」

現在、東京・墨田区の製造業者7社とともに新しいプロジェクト「SUMIDA CONTEMPORARY」を立ち上げたグレットリさん。金属加工、ブラシ、ガラスと参加企業は実際にバリエーションに富んでいる。

「江戸から高度経済成長期まで、日本を支えてきた東京の企業が、現代に何ができるのか。ゼロベースから考え直していく挑戦的なプロジェクトですが、そのクオリティの高さには自信があります」

SUMIDA CONTEMPORARYは、IFFT/ILL 2018にて、国内初披露を迎える。

## IFFT / ILL INFO

### SUMIDA CONTEMPORARY

西2ホール E-22

墨田区の製造業者と国内外の気鋭デザイナーが協働し、極めて現代的でデザイン性の高いプロダクトを発表。参加デザイナーにジャスパー・モリソン、ビッグゲーム、レオン・ランスマイヤー、長嶋りかこ、藤城成貴など。

● 11/16 12:15~13:15、ダヴィッド・グレットリが、デザイナーの熊野亘とともに、地域のものづくりの未来について語るトークショーを行います。

